

新渡戸稲造の教育愛と慈悲の心

—— 母の広い見識と子育てを中心として ——

Dr. Inazo Nitobe's love of education and his merciful heart .

— Focussing on his mother's child care and her great insight —

坂井久司†

Hisashi Sakai

Abstract : Dr. Inazo Nitobe studied abroad in the States and Germany in the early years of the Meiji era. He is famous for the fact that he introduced the Japanese mind to foreign countries by his book "Bushido," which was translated into ten foreign languages. He was well known as highly internationally minded, and worked for the League of Nations as the first Japanese vice secretary-general. As an educator, he served as professor of a Sapporo Agriculture School, principal of the First Senior High School (Ikko) , professor of Kyoto University and also Tokyo University, and took office as the founder president of Tokyo Woman's Christian University and bred up a large number of young people. In this essay, I will study in what kind of home the great man was brought up and what kind of home education he received, focussing on his mother's education.

1. はじめに

日本から遙か太平洋を隔てたカナダのビクトリアで1933年(昭和8)10月15日偉大な一人の日本人が72歳の生涯を終えた。それは「願わくはわれ 太平洋の橋とならん」¹⁾ と言う志を生涯もち続け、国境を越えて人を愛し、教育に情熱を傾け、日本の魂を世界に紹介し、そして最後まで平和のために努力し続けた国際人新渡戸稲造その人である。

彼の代表的な著書「武士道」は1900年アメリカで出版された。英文で書かれたこの著書によって、僅か数年の間に”新渡戸稲造”と言う名前は国際的に知れ渡った。「武士道」は一つの無意識的で、抵抗し難い力として国民及び個人を動かしてきた。稲造は何百年もの長い歴史の中で日本人の心に培われてきた武士道の精神が日本人の道徳基盤となっていることを世界に紹介したのである。

日本に対する知識がまだ殆ど普及していなかったこの時代に、日本人の精神構造について広く世界に向けて発信したこの著作に欧米の読書界は沸き返った。

「武士道」執筆の動機の一つはドイツ留学時代(1887: 明治20年)、ベルギーに出国してド・ラヴェレー教授の講義を受け、教授が散歩するときには、いつもついて行った。ある日、一緒に散歩しながら話しているうちに、話題が日本の教育のことになった。

「日本の学校では、宗教について何を教えているのかね？」と教授に聞かれた。

「いいえ、日本の学校では宗教など教えていません」と、稲造が答えると、教授は驚きの顔で、

「それなら、学校では道徳についてどう教えるのかね？」と言ってから、暫く考えていたが、独り言のように、

「道徳の教科がなくて、どうして国民に善と悪とを覚えさせるのだろうか」不思議そうにつぶやいた。²⁾

稲造が、ド・ラヴェレー教授の質問に即答出来なかったこの一件と、もう一つの動機は日本の思想や風習に対するアメリカ育ちの妻メリーが常々いただいている数々の疑問に答えるためでもあった。

つまり、日本と日本人である自分を理解させる。この最も身近な義務を果たすことが「武士道」の執筆につながったのである。日本の封建制度と共にやがて消えゆくであろう道徳の掟としての”武士道”、しかし、

† 愛知工業大学基礎教育センター

武士道の目指す道徳体系はキリスト教の正しい教えをそこに接ぎ木させることによって存続させることが出来ると稲造は言っている。³⁾

「武士道」は世界的なベストセラーとなり、当時のアメリカ大統領セオドル・ルーズベルトも愛読して日本に格別な理解を示した。その後、「武士道」はドイツ語、ポーランド語、フランス語、中国語など、世界 20 数ヶ国語に翻訳され、100 年を経た現在でも世界各国で読み続けられている。そして、この武士道精神は稲造の心の核となり、生涯を通じて日本人新渡戸稲造を支え続けたのである。

ここでは偉大なる国際人新渡戸稲造の生涯持ち続けてきた教育に対する並々ならぬ情熱と、弱い者に対する慈悲心がどのような境遇の中で育まれていったのかを、彼の母せきの家庭教育を中心に考察してみたいと思う。

2. 稲造の生い立ち—幼・少年時代—

新渡戸家は代々南部藩の重役を務めた上級氏族の家柄であった。稲造に特に大きな影響を与えた人物として祖父新渡戸傳が挙げられる。傳は不毛の大荒野であった青森県三本木原の開拓を藩に誓願し、不屈の開拓精神をもって灌漑工事を遂行、奥入瀬川からおよそ 11km にも及ぶ水路を完成させ、三本木原を肥沃な耕地に変えた人である。時代の先駆者であり、開拓事業に一生を捧げた祖父の先見性と実行力は父十次郎を経て後に稲造へと受け継がれてきた。

新渡戸稲造は、1862 年（文久 2）9 月 1 日、南部藩士新渡戸十次郎、母せきの三男として、盛岡市鷹匠小路の邸内で生まれた（当時の人工は約 4 万人）。名前は祖父傳の開拓地三本木原で初めての米の収穫されたのに因み、「稲之助」と命名された（後の稲造である）。⁴⁾

父十次郎（1820：文政 3 年～1867：慶応 3 年）は、19 歳で江戸に上り、勉学と人間としての修行に努め、後に藩主南部利済の中奥小姓となり、新任厚く、藩公のお供として、盛岡と江戸を往復し、遂に江戸勘定奉行に取り立てられた。1855 年（安政 2）野辺地、下北のお台場築立に成功し、ついで、父傳と共に三本木原開拓に精魂を傾け、傳の最も良き後継者と期待されていたが、1860 年（安政 6）藩財政を助けるため、フランスと直接交渉するに及び、誤解を受けて一時謹慎の身となる。間もなくその誤解は解けたが、その後病（病名は脚気衝心）を得て遂に立たず 48 歳の若さで逝去した（稲造、僅か満 5 歳）。⁵⁾

母せきは、南部藩士伊藤氏の娘で、藩中でも評判の賢夫人として知れていた。夫十次郎が江戸詰ということもあり、留守がちの家庭をよく守っていた。男子 3 人、女子 3 人、妾腹の女子 1 人と計 7 人の子ども達

の養育は大変であったと想像される。⁶⁾ 母せきは、「稲造は利発な子だが、強情で腕白で、たびたびご近所の子の親御さんから、苦情を持ち込まれる。困ったものです」と言って、ため息をついていた。

稲造は目から鼻へ抜けるところのある腕白であった。来客があると、ずかずかと座敷へ現れて、「何の用があつて来たか？」と聞いたり、「用が済んだら、さっさと帰ればいいのに」と、頭ごなしにやっつけるという具合で、家の者はいつもはらはらし通してあった。⁷⁾ こういう腕白な少年ではあったが、末っ子なので、夜寝るときは、いつも母に添い寝をしてもらっていた。時々 3 歳年下の従兄妹が泊まりがけで遊びに来ることがある。そんな時は母と一緒に寝てもらえないので、母に気づかれないようにそっと手を伸ばして従兄妹の髪を引っ張ったり、つねったりする。女の子が泣き出すと、「これ稲造、弱い者をいじめるものではありません！」と、母に叱られ、一人寂しく眠らなければならなかった。⁸⁾

(1) 母の極上料理

1860 年代の風習では、鶏や野鳥を殺して食べることは非難しなかったものの、四つ足の肉は忌み嫌われ、何処の家でも食べようとしなかった。しかし、母せきは、この牛肉を、栄養豊富な食料として食卓に出している。稲造は、次のように述べている。「新しい食物を家に取り入れた母に譲らねばなるまい。私の生まれた地方は、馬と牛の太っていることと豊富さで有名であった。どちらも食用のために飼育されたものではない。牛や馬の肉を食べるなど、卑しむべき冒瀆と考えられていた。—中略—これまでの風習は、鶏や野鳥を殺したり食べたりすることを非難しなかった。私たちはいつも、鹿肉の煮込みが火鉢の上で湯気を立てている御馳走を歓迎した。家族はよく、居間で鹿鍋を囲み夕食をした。年下の子供達は、良い席をわれ勝ちに取った。しかし末っ子はうまい料理を食べることで、特別扱いを受けた。寒い冬の夜、ひよこが親鳥に、さあエサを食べましょと呼び集められるように、母の呼び声で、皆夕餉の席に座るのだった。炭火の上でグツグツと煮える鍋を、母はいつもより注意深く取り仕切っていた。召使いの者がうす切りの肉を盛った皿を運んでくると、母は特に注意して肉を吟味した。それから慎重に鍋の中に入れた。私たちは『おあがり』の合図をずっと待った。実に美味しかった。こんなに美味しい獲物の肉は食べたことがなかった。鶴の肉であろうか？鴨か、亀か？母の答は今でも私の耳に聞こえる。『お前たち、これは牛肉です。牛がお寺に逃げ込んだという、あれは皆つくり話です。動物は食べて良いのです。牛肉は身体に良いそうだが、おまえ達が好きかどうかを案じておりました。わかりま

したので、これからたびたび頂きましょう。』⁹⁾
 牛肉を食べるといふ小さなことではあるが、当時これを実行した母せきの理知的な態度、時勢に積極的に対応する聡明さは、正に賢母と言える。

(2) 家庭における西洋文化

父親がまだ健在の頃（稲造の4歳の時）、父十次郎は南部藩江戸詰め勘定奉行の職にあり、役柄上自然に盛岡の新渡戸家にも西洋の文物が入ってきた。彼の英文の「思い出」によれば、「私の家に、何か異国なつかしい印象を与えるものが三つ、四つあった。それは私の四歳位の時であった。一つはオランダの鑑マッパ箱で、火打ち石でもした灯でなければ汚らわしいとされ神棚に上げられないので古筆筒の奥深くしまい込んであった。もう一つはスイス製のオルゴールで、これも末っ子の私だけが絶えず新しいものを求めていて、いつも楽しんでいた。もう一つはびろうどの箱に入った銀のナイフとホークで、これはどこから来たものか抽出の奥深く葬られていた。多分父が江戸の御留守居役で西洋の文物に触れる機会が多かったので、おそらく田舎の親戚などに見せるため持ち帰ったものであろう」¹⁰⁾と言っている。こういう環境の中で、幼少から利発敏捷な稲造は、いち早く新しいものに好奇心を抱き、西洋への憧憬を育んでいた。

(3) 袴着の儀

武士の子が5歳に達したときに行う儀式「袴着の儀」が新渡戸家で行われた。袴を着て碁盤の上に立たされ短い刀を腰に差してもらったとき、「全身をシューーンとしたものが貫くように感じ、自分が偉く重要な者になった感じがした」¹¹⁾と彼の著書「思い出」の中で述べている。子供心にも「自分は武士なのだ、刀に誓って忠誠を守り、勇気を持ち、礼儀正しく」等と武士道の精神を感じ取っていたに違いない。その実例が、この「袴着の儀」以降、幼い彼は、男の子として朝は暗いうちから道場に通い、柔道・撃剣の稽古、四書五経を主とする漢文の勉強を始め、約二年間を過ごした。¹²⁾

(4) 父の死と母の教育

父十次郎が亡くなったとき、祖父傳は70歳を越えていたが三本木原開拓第二次計画のために奔走しており、盛岡の邸宅は留守がちであった。長男七郎は既に妻帯していたが、長女の峯以下6人の子女の教育と家事一切は母せきの責任となっていた。

賢明な母は、家名を汚さぬためにもどのような教育を子供達に与えるべきか、祖父、叔父たちに相談し、その結果、従来のような読み書きの他に、初歩の英語と男子には外国人の襲撃に備えて軍事教練を

受けさせるべきであると考えた。

母せきはいつも「一生懸命勉強して偉い人になきなさい。偉い人になって名を挙げなさい。」と稲造に言い聞かせていた。

兄道郎と稲造は、新渡戸家の掛かり付けの医者に頼んで、英語の手ほどきを受けることになった。はじめはABCから、次には簡単な文房具の名称、それと同時に、インキと墨の違い、ペンと筆の違いなどを教えた。

小さな単語一つ一つが未知の世界を広げてゆく、幼い子供には難しい論語や孟子の素読より英語の方が魅力的であり、この英語との出会いが稲造の好奇心を一気に膨れあがらせたのであった。稲造は、母に「東京へ行かせてもらえさえすれば、きっと偉い人になってみせる」と再三再四、せがんでいた。

稲造も後に「英語の勉強をしていると益々好奇心は募るばかりで、次第に日本中の偉い人の集まる東京へ行きたくてたまらなくなってきた」と述べている。¹³⁾

3. 勉学を志す稲造

幼い稲造は有名なきかん気の子供で、短気で怒りっぽく、乱暴で、母は毎日のように隣近所を謝りに歩かなければならなかった。そこで、母せきは、女手一つでこの子を間違いなく育てることの容易でないことを悟り、祖父傳とも相談の上、稲造が日頃特に可愛がられていた叔父の太田時敏に、養子として教育をゆだねることにした。それに、新渡戸家は資産が乏しく、学費も思うに任せない事情もあったようだ。

太田時敏は父の弟で東京に在住し、30歳前後の若さであった。洋服商を営んでいたが、子どもがなかった。祖父傳からも書面で「いよいよ孫たちが厄介になることになったが、東京で教育することは至極結構、稲造は正しく導けば、国家に役立つ著名な人士になるであろうが、万一間違ると恐ろしい悪党になりかねない云々」と書いている。¹⁴⁾

こうして稲造と兄道郎は1871年（明治4）駕籠で10日間かかって上京した。数え年10歳であった。

(1) 叔父の教育方針

上京した当時は築地にある私立の英語学校に入った。姓も太田と改め、太田稲造と改めた。叔父は稲造の才能に多大の期待をかけ、「勉強をどんどん続けろ。東北の人間が馬鹿ばかりでないことを世に示せ。学問は冒険で、山あり谷ありだ。もし失敗したら御者になれ。鞭を手に馬車を走らせ、あの高慢な南の者に道を譲らせるのだ」と、維新戦争で惨めな敗北を喫した彼は、官軍への恨みを忘れることが出来ず、秀才の義子を育てることによって、復習しよ

うとしているかのようであった。また「お前には家名を辱めぬため、また代々仕えた殿様を辱めぬため、旧敵官軍の人々を凌ぐ偉い人物になる義務があるのだ」と論じている。¹⁵⁾ 暫くして、稲造は南部藩経営の共憤義塾へ入れられた。通学生 100 名、寄宿舎生 100 名ばかりの英才教育を行う学校で、週一回叔父のうちへ帰った。

この学校では、教科書は全て英語で、それを日本人の教師が教えていた。稲造の成績は極めて優秀であった。

叔父は稲造が熱心に勉強するのを見て、更に勉強を続けさせようと、1875 年(明治 8)開校間もない官立の東京外語学校へ入学させることにした。稲造は 14 歳で、入学出来る最低年齢であった。

当時、太田家では洋服商の経営に失敗し、再婚した妻とも再び離婚していた。従って、稲造の寄宿舎代を工面することはかなりの物入りであった。そんな状況の中でも叔父は「待望を目標に努力せよ」と言い、郷里の母からも「家名を汚さぬよう、ご先祖様を辱めぬよう、おじい様や父上のように偉い人にならないと、お母さんっ子だと言われる。一所懸命勉強して、有名な人になっておくれ」と励ましの手紙が届いている。¹⁶⁾

稲造は、外語学校で素晴らしい先生と出会う。それは日本の師範教育の祖と言われるスコット氏である。「思い出」の中に、次のように書いている。「スコット先生ほど私に勉強に対する愛情を吹き込んでくださった方はない。彼は教育者という言葉の持つ最高の意味の教育者で、各々の生徒の魂の内に眠っているものを抽出してくれた。・・・彼はもっと偉大なもの・・・叡智を持っていた。」と。稲造はスコットの影響の元で学問への情熱が激しく燃え上がったのである。

スコット先生からベーコンの随筆の良さ、シェークスピアの優秀性、ミルトンの尊厳を学び英文学を次々と読破していった。こうして文学に興味と愛情を抱くようになった反面、進化論を鼓吹し、聖書をけなすスコット先生に反発して彼は、「キリスト教を導入することが日本国民を善良にし、日本を世界の偉大な勢力にするために必要欠くべからざるものである」と言い切るようになり、キリスト教への関心が深まっていくことが分かる。

(2) 明治天皇東北巡幸

1876 年(明治 9 年)6 月から 7 月にかけて、明治天皇が東北・北海道方面に御巡幸になった。その途次、6 月 12 日、三本木の新渡戸家に立ち寄られた。同地方開拓に献身した祖父傳、父十次郎の功績を賞され、当日家族一同に拝謁を賜り、今後家族の者、子孫も祖父の志をつぎ農事に励むようお言葉を

賜って、金一封が下賜された。¹⁷⁾

稲造は勉学の身で、この栄には浴せなかった。しかし、新聞で当時の事情を読みとり、自分自身が天皇から直接お言葉を戴いたかのように、感激した。御下賜金は家族の数に細分され、稲造にも送られた。彼は永久に記念するために、このお金で金縁皮表紙の英語の聖書を買った。福音書の神秘に心を惹かれていったことを実証するものである¹⁸⁾ この時の感激が稲造に農学を専攻させる動機となる。

(3) 札幌農学校へ

1876 年(明治 9 年)、北海道開拓使長官黒田清隆の先見の明により、アメリカ州立の大学を型どった農学校が設立され、マサチューセッツ農科大学のウィリアム・クラーク博士が教頭に招聘されて経営に当たった。この種の学校としては日本で初めてのものであった。政府は東京英語学校第一級、第二級、最上級の教室に開拓使を派遣して農学校の生徒を募集した。¹⁹⁾

農学を目指した稲造は 1877 年(明治 10 年)9 月、第二期生として入学した。クラーク博士は「少年よ大志を抱け」という言葉を残し、既に帰国していたが、その影響は色濃く残っていた。第二期生の仲間には、内村鑑三、岩崎行親、宮部金吾等全部で 17 名であった。東京から北海道までは政府で用意した船旅であり、彼は故郷の山々が見える海岸沿いに船が進むとき、「お前は元気で耐えなければいけない。お前が勉強して偉くなってくれば、いくら白髪になってもかまわない。気を弱くして、家に帰りたいなどと思つてはいけない。十年の月日は何でもない。お前には大事な仕事があるのだから心を強くしなければいけない。私のような弱い老人でさえお前を手放していることに耐えているのだから、お前は元気で耐えなければいけない・・・」とかつて母に言われた言葉を胸の中に繰り返して、甲板の上で遙かに母を偲んだことが『思い出』の中に見える。²⁰⁾

クラーク博士の教育方針は、校則を「紳士であれ」の一条のみとし、身をもって全校の範となり、全て人格教育の方針で、人格を鍛える人間をつくる教育に徹し、特別に修身科を設けず、全科を即修身であるとした。その熱意と人格は全校を感化した。博士は科学者でありながら、毎朝、祈祷してから授業をはじめ、全校生徒に聖書を与え、自ら青年の宗教指導に当たり、全人教育に努力した。

僅か八ヶ月間の在任であったが、その人格、その徳が学生に及ぼした感化は、在任中だけではなく、北海道大学となった今日もなお生き続けている。²¹⁾

稲造はクラーク博士が残していった「イエスを信ずる者の契約」に二期生の先頭を切って署名し、キリスト教に入信するのである。稲造は猛烈に勉強し、

親友の宮部金吾、内村鑑三等と主席を争っている。稲造の英語力は群を抜いており、誰も彼の英語を負かす者はいなかった。後に彼の運命を決定づけるものとなるのである。しかしスポーツが得意で、活発だった少年は成長するにつれて思索的な傾向が深まり、内向的な性格が増していった。

ア、キリスト教への疑問

稲造は、クラーク博士が残していったキリスト教に関する膨大な数の書物を殆ど読み尽くし、その結果、次第にキリスト教に疑問を抱くようになる。それは、平和を説く一方で世界の国々を植民地化しながら布教を勧める西洋のキリスト教に対する不審である。それに加えて、過度の読書のために視力が急激に衰え、更に信仰上の悩みも加わって神経症になり、やがて稲造に大きな悲しみが襲うことになる。

イ、母からの手紙

「なれぬ気こうゆえ、どふぞどふぞおわづらいなきやう御用心可被成候・中略・食べ物に気をつけ可申、子供ら七人の内にも、兄七郎とおまへは丈ぶに御座候 それに付けても大切に可被成候」²¹⁾

「来年も夏休みに参り不申候哉 どふぞおめにかけろいろおはなし承り又は御はなし申度と毎日毎日存知居り候・中略・くり事ながら時かう御いとみ、あまりむりな事致、身よわり不申程に御勉強可被成候 目もちか目に相成候よし、目斗になきもの、それにじゅんじ身もよわり可申、別して是から追云々寒に相成り候間かならずかならずむりな事いたさず御無事に御くらし被下度、それは何より己れらへの孝行に御座候」²²⁾

「御地はまことに御寒く、かんたんけへは十度の由、実に実におそるべきどふぞひへをこみつよくわづらいても出ぬよう何分御用心可被成候 此地のくらしはあたたかにてゆきもなくしのき安きと存じおり候処、作今寒気つり廿五度は一ばん寒いのに御座候 折角御しのぎ どふぞどふぞ当年は鳥渡でも御出おんあい被下度御待ち申しおり候 何も何も申度事山々程御座候得共、筆に尽くしかたく何事も御無事御無事といのり申候 万々年を御いわめ度 かしこ 明治一三年一月廿六日 母より 稲造どの」²³⁾と、言うものである。

稲造の病気が治らないために、久しく郷里の母に便りを書かずにしたため、ついに母は、心配のあまり次のような手紙を書き送ってきている。

「さっぱりお便りなく、いかがと御案事申御様子御たづね申候 いよいよ御無事に御座候哉 此

ほう兩人共無事御安心被下たく候 御地は未だ雪も御座候半しかし少くはだん気に相成可申候 当地も此此は雪もあり風もあり雨となり申候 東京よりも度々御便り御座候 いつれもかわる事なく候得共其内安村のよし子、亀次事二月より病気の所今大病にて、是には心ばい致しおり候 東京にては大きに大きにお父さまに御心配かけ御世話に相成りおり候 安村にては姉夫婦の心ばい申す斗りなし、それに付き、新渡戸西市伯父にたのみ今日当地出立上京被下候 何事も遠方ゆへま事に不都合、物入困申候 それゆへにゑんほうに居る人々は何分身のうへいたわりどふぞ御わづらみなきやう、かならずかならず病氣かましき事ある時は、さっそくいしゃに見ておもらひ被成候てつよく致さぬ御用心可被成候

いづくにおり候ても幾年あへ不申とも無事なれば何より心安しみにぞんじ申候 さりとて、病かくすべからず何分御ゆだんなふ身体御大切専一に御座候もわけて御地は気こうあしきゆへ御あんじ申候 毎年毎年まづ寒さは凌けた又夏はどふやらと案事くらしをり候 くり事ながら御まめまねしく御くらし何分御ゆたんなふかげなからいのり申し候どふぞどふぞ御便りまちをり申候 先づは後便と書き残し申候 万々めでたく かしこ 四月四日 母より 稲造どの」²⁴⁾

母のこの手紙には、母親独特の勤が働き、稲造が親に心配をかけまいと思っている気持ちを感じ取り、「さりとて病かくすべからず」と言っている。稲造はこの一節を胸もつぶれる思いで読み下したに違いない。それはこの手紙を読んだ直後に、叔父太田時敏宛に長文の手紙を書き、自分の病状を訴えていることから分かる。

母せきからのこの四通の手紙で分かるように、遠く離れた極寒の地で学問に情熱を注いでいる我が子を愛おしく思う気持ちがひしひしと伝わってくる。

それは稲造より千年も前の平安時代に活躍した歌人、紀貫之の「世の中に 思ひあれども 子をこふる 思ひにまさる 思ひなきかな」と歌われた歌の心情と何ら変わることがない。

ウ、母の死

1880年(明治13)7月、稲造は病氣治療のため一度故郷の盛岡へ帰ってみようと思立った。翌年の卒業を控え、同行の友人と観光を兼ねて十和田などにも立ち寄りながら気分良く盛岡の家へ帰り着いた。10歳で母と別れ上京してから10年ぶりの帰郷であった。いつも手紙で「世界にまで名を挙げよ！」と励まし続けてくれた母、その母に合おうと盛岡に帰郷してみると、その3日前に

母せきは永眠していた。母は、乳癌で重体に陥りながらも稲造の帰りを待ち続けていたのである。

稲造は母の死を看取れなかった自分を一生許すことが出来ず、深い後悔の念にさいなまれた。

母を失って悲しみに打ち拉がれている稲造を農学校の親友たちが慰め励ました。とりわけ内村鑑三が信仰に基づいて稲造を立ち上がらせようと渾身の力を振り絞って手紙を書き送った。²⁶⁾ その手紙の一節には「兄弟よ、悲しみに拉がるること勿れ、是れ汝の健康に、大害あればなり、汝は健康の回復の為に、帰省したるなり、汝の亡き母上は、御自身の体より汝の健康を心配したまへり、勇敢なれ、強き健康なる人とならんと試みよ、而して、国のため、神のため、汝の家名のため、汝自身のために、立派な有用なる仕事をして、亡き両親を喜ばせんことを、努めよ（『身を立て、道を行い、父母の名を後世に挙ぐるは、孝の至りなり』）、我等は、決して汝のために祈ることを怠らず、兄弟よ、愛する兄弟よ、我は汝が体は健康、振興は活発、希望は豊か、恩恵に満ちて再び相会せんことを、切に期待し、且つ祈るものなり」²⁷⁾と書かれている。

その後の稲造は、東京、札幌時代に母から貰った手紙を心の支えとして、肌身離さず、この教えに背かないように生涯を歩み続けた。後に、この十三通の手紙を立派に装丁して巻物とし、大切に保管し、母の命日には個室に入り、これを開いて母の霊を弔い感恩にむせぶのである。²⁸⁾

稲造が、婦人や子供に優しく、特に弱者のために活躍するようになった理由は、母から受けた教えと恩返しへの思いが秘められていたものと推測される。²⁹⁾

エ、「サーター・リサータス」との出会い

大きな悲しみにあった稲造は、一冊の本と出会う。それはイギリスの思想家トーマス・カーライルの代表作「サーター・リサータス：Sartor Resartus」であった。この哲学書の主人公トイフェルス・ドレックは幼くして父を失い、若くして母と死別するという稲造と同じ境遇であった。悩める主人公が力を振り絞って自己と対決し、精神的危機から脱していく姿に感銘した稲造はこの本を三十数回読み返し、自らも次第に立ち直っていった。この本の中には、「人生は、必要という境遇に取り囲まれているが、人生の本当の意味は自由な意志により、自分の判断で責任を持って行動することである」と書かれている。また「享樂を愛せず神を愛せよ」すなわち、「永遠の肯定：Everlasting Yes」と言っている。³⁰⁾

”永遠の否定から 永遠の肯定へ”

母を失って深い悲しみの中にある稲造にとっては、キリスト教的なものや武士道との違いはあっても、実感として、自分の母の感化など思い合わせて身にしみて共感し、慰めを与えられた。心が安らぎ、おのずとカーライルの思想に惹かれていった。³¹⁾

「サーター・リサータス」は稲造の座右の書となり、カーライルは彼の一生の師となるのであった。

オ、生涯母を慕い続ける

母を慕わない子供はいないであろう。しかし、稲造の母せきに対する思慕の気持ちは特別である。しかも彼の母への慕情は、母を亡くしてからも衰えることはなく、年とともに強くなっていった。「随想録」の中の『慈母の愛』で、「慈母の情・・・誰か其の深さを測るを得んや。科学も之を量る能はず、哲学も其力を度り難し。慈母の愛は、神の愛に最も近く、而して人間愛情の至高なる発現なり。」と言う名句と、更に「母や既に亡し、吾人は母の影像を見、また母存すと想ふを心やりとす。」言い、更に「アア基督教徒たる我が良友よ、予が、年々の母の命日に逢ふ毎に、亡母の照影を床の間に安置し、花を捧げて、追慕感恩の情を寄すとも、希くは予を責むるに偶像礼拝を以てせざらんことを」と述べ、更に「少くも予は一年一回、母の給ひし凡ての御文を集めて作れる一巻の巻物を開いて、茲に清き愛の尽きざる泉に飲し、我が精神の渴きを愈す。」と言う稲造の作り出した母への慕情の最高の姿である。この背景には、彼が七人兄弟の末っ子で、母せきに最も甘えることが出来たことと、父十次郎が早くに他界しているため、母への慕情が一段と強まったと思われる。それに、前掲のように、十歳で上京してから一度も会えず、十年目にやっと母に会えると思つて故郷へ帰ってみれば、その母は三日前に亡くなっており、葬儀もすんでいたという悲痛、無情の運命に遭遇したと言うことも大きい。三日違いで母の死に目に会えなかった無念さは、彼の胸に突き刺さり、生涯、母思慕の情を深めていったといえる。³²⁾

4、慈悲の心

1884年(明治17)アメリカのジョンズ・ホプキンス大学留学中に親友宮部金吾に宛てた手紙で、「札幌に貧しい人々のための学校を創設したい」と言う夢を語っている。その手紙には「二、三年前僕が未だ札幌で教えて居った時、僕は公衆のために学校を設立する必要を強く考えさせられた。僕の札幌農学校の理想は

三種の生徒を収容するにある。その第一は老人或いは成人の爲にして、講義は邦語で歴史、経済学、農学、及び自然科学を教えること、第二は青年にして専門学校又は大学に入学を希望するも、官公立の予備校に入学することの出来ない人々の爲に、また第三には貧しい人々の子供らに夜学校を建て、初等小学の教育を授け、出来れば英語を少しくし、また測量其他の初歩をも加えたい。これらの部門に女学校を併備し、女子に刺繍、裁縫、編み物を教え、邦語の他に英語をも教える様にしたい。斯かる企図は神の栄光を崇める道となろうと思う。片時も札幌におけるこの教育上の理想が脳中から離れない³³⁾と語っている。

それは、弱者を助けずにはいられないという稲造の武士道的気質と、キリスト教の愛と奉仕の精神との結びつきから生まれたものであろう。このような心境を稲造に起こさせたものはいったい何であったのか。それはクエーカーとの出会いが考えられる。

クエーカーは十七世紀に英国に起こったキリスト教の一派で、形式や儀礼を無視し、何よりも宗教的感動を重んずる人たちである。その感動の最高潮の時は身体が振動するので、クエーカー (Quaker: 震える人) と言われるようになった。³⁴⁾

”クエーカーの誠実さ、簡素、純一なところに人間は神との繋がりがあがる。日本の禅にも通ずるかのようなクエーカー”と、稲造はこんな所に魅力を感じたと思われる。³⁵⁾

もう一つ考えられることは、稲造の生涯に大きな影響を与えたメリー・エルキントンとの出会いである。3年間の大学生活が終わりに近づいた頃、稲造は、フィラデルフィア市のクエーカーの集会でメリー・エルキントンを紹介される。この時の状況を稲造は日記に、「なんとという聖く美しい、威厳のある婦人だろう。このような米国婦人が日本へ来て、指導してくれたならば、日本の婦人たちも、どんなにか幸福だろう³⁶⁾と書いている。

その後、稲造は3年間ドイツ留学を行うが、その間もメリー・エルキントンと文通を続け、1891年(明治24)二人はフィラデルフィアで挙式。

(1) 孤児との出会い

ドイツ留学中のある日、売店でコーヒーを飲んでいると、尼さんに連れられて40人ばかりの孤児院の子供達がやってきた。孤児たちは同じ年頃の母親や乳母たちに付き添われて嬉しそうに遊んでいる子供達をうらやましそうに眺めていた。稲造は不意に胸を締め付けられるような気持ちになった。

その日はちょうど、生母せきの命日に当たっていたので、稲造は売店のばあさんに、「あの孤児院の子供達に、チョコレートでもミルクでも、一杯ずつやってくれないか。勘定は私が払うが、その事ほど

うか尼さんには知らせないでくれ」と言った。

子供達が帰る時間になって整列したとき、引率の尼さんは子供達へ言った。「みなさんに御馳走してくださった人は誰か分かりませんので、お礼の申しようがありません。それで、みなさんで賛美歌を歌って、その方へのお礼に代えましょう」

40人ばかりの孤児たちは、声をそろえて賛美歌を合唱すると、誰にともなく手を振って別れを告げながら、元気よく帰っていった。

「お母さん、あなたの霊前に花束を手向ける代わりに、外国の唱歌を捧げましたよ」心の中で亡き母へ語りかけながら、帰って行く子供達を見送る稲造の眼には涙が光っていた。³⁷⁾

(2) 遠友夜学校創設

1891年(明治24)、新渡戸夫妻は札幌に着いた。新進気鋭の新渡戸教授は、教室へ出る前、数分間の黙祷をしてから授業に臨み、常に「教育は祈りをもってなされるべき」であるとの信念を持っていた。

学内では、学生寮の舎監、図書館主任、予科主任、教務部長や衛生委員長まで兼ねて、体がいくつあっても足りないほどであった。

家庭では日曜日ごとに「聖書研究会」を開き、集まった学生たちに聖書を与え、集会の後は茶菓をもてなして懇談に時間を過ごした。³⁸⁾

その他北海道庁の技師を兼任したり、新しく創設された私立中学校(北鳴中学校)の校長も務めた。

1893年(明治26)万里子夫人(メリー・エルキントン)の所へ、実家から二千ドルの送金があった。

かつて、慈悲心に富んだメリーの父親ジョセフ・エルキントンが一人の孤児を孤児院から引き取って育てた。この女兒は一生独身を通し、エルキントン家に仕え六十歳で亡くなった。

送られてきたお金はその女性の遺産の一部であった。新渡戸夫妻はこのお金は私的には使えない。かねてからの夢であった「貧しい働く少年少女の爲に役立てよう」と、札幌東部豊平橋付近にあった札幌独立教会付属日曜学校の敷地と校舎を買い取り、夜学校を建てることになった。

貧しい家庭の児童や向学心に燃える若者を集め、男女共学で学費・教材すべて無料とした。指導は、稲造や友人、札幌農学校の学生たちが無料で当たることになった。学校の名前は、論語の「有朋遠方来不亦楽乎」の句より『遠友夜学校』と名付けられた。³⁹⁾

最初の内は週二回の授業であったが、間もなく希望者が増え、毎夜となり、一般科目の他に看護法、礼式、裁縫、編み物などの実用的学科に重きを置いて、更に国民として恥ずかしくない趣味と常識と品性の陶冶に力を注ぎ、日曜日には修養講話を行った。

その後、稲造が北海道を去った後、この学校の運

営は農学校出身者の代表や農学校長が努めた。この遠友夜学校を卒業した生徒は北海道全域にわたり、重要な地位に就き、活躍した。

佐々木⁴⁰⁾は「遠友夜学校の設立には、明治二十五年に一子・遠益が、僅か生後九日で亡くなったことが、深くかかわっていることは、その校名からも推察される。『思へただ 使ふも人の 思ひ子を 我思ひ子に 思ひくらべて』(著書『世渡りの道』より) 稲造は、我が子に与えられなかった親心を、著作や教育活動によって多くの人々に与えた。」と述べている。

因みに、この夜学校は五十年間続き、その間に約六千人の若者が学んだ。廃校の理由は、佐々木⁴¹⁾によれば、「遠友夜学校は、後に軍事教練を拒んで、廃校に追いやられた」と記しているが、稲造の平和を愛する信念を受け継いできた学校としては、已むを得ない拒否宣言だったのだろう。

5. おわりに

武士の子として生まれた稲造が、父や祖父の行ってきた三本木原開拓事業の偉大さを明治天皇東北御巡幸で知る。そして何よりも母せきの先見性のある愛情に満ちた家庭教育によって成長し、10歳で上京し、親元を離れて勉学に勤しみ、札幌農学校第二期生として北海道に渡る。卒業一年前に10年ぶりに故郷へ帰ってみれば三日前に母は他界していた。こうした悲しい運命に逢いながらも、キリスト教の精神と、トーマス・カーライルの著書「サター・リサータス」の中の『永遠の否定から永遠の肯定へ』に気づき、次第に立ち直る。そして、アメリカ留学、ドイツ留学を体験し世界最先端の学問を身に付け日本に帰郷。その後は偉大なる教育者として又、実業家、政治家としても活躍し、世界平和の為に心血を注いだ。

一高校長時代には、閉鎖的だった学生たちをジェントルマンに育て上げ、世界に通用する国際人にしようとした。その教育理念は札幌時代から一貫して「人格主義」、この理念を教育の場で実践し、また彼自身も人格者であるよう絶えず人格的な触れ合いを大切に努力して、学生たちに接している。

教育者稲造は当時まだ遅れていた女子教育にも格別の関心を寄せ、1918年には東京女子大学の創立に際し、初代学長に就任している。一年足らずの間に校章の制定をはじめ、女子大学の基礎を築き、学内に人格主義の風を吹き込んでいく。

稲造の代表的な著書「武士道」の中でも”THE TRAINING AND POSITION OF WOMAN: 婦人の教育と地位”で、“Bushido similarly praised those women most “who emancipated themselves from the frailty of their sex

and displayed an heroic fortitude worthy of the strongest and the bravest of men.”: 武士道もまた同様に、「女性の弱さより自分を解放して、最も強い最も勇敢な男性に値するような、たくましさを発揮する婦人」を賞賛した。”と云って、女性が決して男性の従属物ではない、常に対等の立場であると言い続けている。⁴²⁾

稲造は20世紀初め日本がまだ農業国であり、工業が未発達であった時代に農・工・商のバランスある発展を望んでおり、極めて先見性に富んでいた。

稲造の人生において特筆すべきことの一つは、1919年国際連盟が設立された折り、稲造の卓越した語学力と、国際的見識、そして人柄を評価されて、国際連盟事務次長に任命された事である。世界27カ国を巻き込んだ第一次世界大戦の悲劇を再び繰り返さない為に、国際平和の維持確立と、人類文化の向上を目指す目的で国際連盟が設立された。彼は国際舞台の中核ポストで活躍し、連盟の精神を普及するために”世界強調こそが平和を築く新しい理念だ”と、各国を説得して回った。

20世紀の初期、既に稲造は世界を舞台に国際問題、民族問題に取り組んでいたのである。

ジュネーブ滞在の7年間は稲造にとって正に充実した日々であった。週末には新渡戸邸にアインシュタインやベルクソンが訪れ世界の平和と文化向上について話し合っている。

二つ目は、稲造の「母を慕う思い」である。7月18日は母の命日であり、「母の愛」として「母の愛ほど神の愛に近い愛はない。幾度歳を重ねても、幼き時の清き心に呼び返し、恩愛の意味を与ふるものは母の愛である。・・・」と母を偲び、”無き親を思ふ思ひを有りし世に もたばや今の悔や無からん”という一首を捧げている。⁴³⁾また、彼が伊香保に転地療養した折りに書き上げた大著「農業本論」の冒頭に、“辱けなく 高恩を追慕し 亡母の記念に 此書を捧ぐ”と書いて、母を思う至情を述べている。⁴⁴⁾

次に教育者新渡戸稲造を見たとき、彼の大学教育に対する理念は、「高い所から根本を究めるような学問をし、何事に臨んでも判断できることが大切である。したがって、大学は職業を授ける所ではなく、偉大な人格に接し、人間を造る所である」⁴⁵⁾と云っている。

稲造は教育者としての忙しい職務の他に、北海道庁顧問、赤十字社、各種の社会福祉事業等20を超える組織に関わり、そして、頼まれればどんな仕事でも引き受けている。彼は、「仕事は天からの命令であり、それを義務とあって、天なるものと働き、その結果を楽しむべきものである」⁴⁶⁾と云っている。この考えが一高校長当時、適切な教訓となり、学校の雰囲気も、生徒自身も変わっていった。

稲造の有名な言葉に「野の花が、黄色に、紫色に、紅色に、白色に、おのずからその色に咲き出でて、自

然の野辺を飾るように、教え子が、その良心と個性と境遇とに応じて、それぞれ独自の道をいき、人生の花野を彩らん」・・・新渡戸稲造はこの詞のように、どんな人間に対しても、どんな境遇の人に対しても優しい言葉で語りかけ、激励している。反対に、情熱の枯れ果てた教育者に陥ることを強く戒めている。

偉大なる国際人新渡戸稲造が世界平和のために一命を賭して尽力し、世界の新渡戸と言われるようになった裏には、母親せきの存在と、宗教的なバックボーンが大きい。それに、大きな理想を持ち人一倍勉学に邁進した稲造の向学心と努力によるものである。

家庭における母親の教育が子供の成長に大きな影響をもたらしていることを立証した良い例であろう。僅か10歳で親元から離して勉学につかせ、「学問が成就するまで家へ帰るな」と言って、自分自身を辛い環境に置き、子供の成長を願う母親。またそれを素直に受け入れ、一心に勉学に打ち込む稲造。

また、彼が素晴らしい友人に巡り会えたこともその人生に大きく幸いした。良きライバルであり、良き相談相手であった内村鑑三、宮部金吾たち、それによい先輩佐藤昌介に巡り会えたことも幸運であった。

諺に、「願いを持って努力すれば 道自ずから通ず」とあるが、努力するにもある程度の金銭的裏付けがなければ目標を達成することは不可能である。

幸いなことに、稲造にとって家庭が比較的裕福であったこと、祖父が開拓事業で立派な業績を残していたことも稲造の向学心を満たす大きな要因になっている。その上で、「願わくはわれ太平洋の橋とならん」と言う信念を終生つらぬき、彼の生涯はこの言葉の実行に捧げられた。

引用・参考文献

- (1) 岩手県盛岡市、盛岡岩手公園、生誕 100 周年記念碑
- (2) 井口朝生、新渡戸稲造一物語と史蹟をたずねて一、P 104、成美堂出版、東京、1996
- (3) 佐藤全弘、新渡戸稲造の世界一人と思想と働き一、P 127、教文館、東京、1998
- (4) 札幌市教育委員会、新渡戸稲造、P 10、北海道新聞社、札幌市、1985
- (5) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 4～5、みすず書房、東京、1981
- (6) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 5、みすず書房、東京、1981
- (7) 井口朝生、新渡戸稲造一物語と史蹟をたずねて一、P 21、成美堂出版、東京、1996
- (8) 井口朝生、「新渡戸稲造 物語と史蹟をたずねて」、P 22、成美堂出版、東京、1996
- (9) 新渡戸稲造、新渡戸稲造一幼き日の思い出／人生
- 読本」、P 19～20、日本図書センター、東京、2000
- (10) 井口朝生、新渡戸稲造一物語と史蹟をたずねて一、P 23～24、成美堂出版、東京、1996
- (11) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 8、みすず書房、東京、1981
- (12) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 9、みすず書房、東京、1981
- (13) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 11、みすず書房、東京、1981
- (14) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 12、みすず書房、東京、1981
- (15) 杉森久英、新渡戸稲造、P 19、学陽書房、東京、2000
- (16) 井口朝生、新渡戸稲造一物語と史蹟をたずねて一、P 40、成美堂出版、東京、1996
- (17) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 28、みすず書房、東京、1981
- (18) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 29、みすず書房、東京、1981
- (19) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 31、みすず書房、東京、1981
- (20) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 35、みすず書房、東京、1981
- (21) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 38、みすず書房、東京、1981
- (22) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 85、みすず書房、東京、1981
- (23) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 85～86、みすず書房、東京、1981
- (24) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 86、みすず書房、東京、1981
- (25) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 86～87、みすず書房、東京、1981
- (26) 井口朝生、新渡戸稲造一物語と史蹟をたずねて一、P 67、成美堂出版、東京、1996
- (27) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 93、みすず書房、東京、1981
- (28) 赤石清悦、新渡戸稲造の世界、P 60、溪声出版、東京、1995
- (29) 仲間一成、新渡戸稲造と現代教育、P 20、明窓出版、1998
- (30) 仲間一成、新渡戸稲造と現代教育、P 23、明窓出版、1998
- (31) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 96、みすず書房、東京、1981
- (32) 赤石清悦、新渡戸稲造の世界、P 59、溪声出版、東京、1995
- (33) 松隈俊子、新渡戸稲造、P 174、みすず書房、東京、1981

- (34) 杉森久英、新渡戸稲造、P 79、学陽書房、東京、2000
- (35) 井口朝生、新渡戸稲造—物語と史蹟をたずねて—、P 98、成美堂出版、東京、1996
- (36) 杉森久英、新渡戸稲造、P 83、学陽書房、東京、2000
- (37) 井口朝生、新渡戸稲造—物語と史蹟をたずねて—、P 107、成美堂出版、東京、1996
- (38) 井口朝生、新渡戸稲造—物語と史蹟をたずねて—、P 119、成美堂出版、東京、1996
- (39) 杉森久英、新渡戸稲造、P 114、学陽書房、東京、2000
- (40) 佐々木美恵子、新渡戸稲造—その魂と言葉の世界—、P51、太素顕彰会、青森県十和田市、2000
- (41) 佐々木美恵子、新渡戸稲造—その魂と言葉の世界—、P51、太素顕彰会、青森県十和田市、2000
- (42) Nitobe inazo、「BUSHIDO」、P 226～227、講談社インターナショナル、東京、2000
- (43) 赤石清悦、新渡戸稲造の世界、P 350～351、溪声出版、東京、1995
- (44) 杉森久英、新渡戸稲造、P 129、学陽書房、東京、2000
- (45) 赤石清悦、新渡戸稲造の世界、P 287、溪声出版、東京、1995
- (46) 仲間一成、新渡戸稲造と現代教育、P 58、明窓出版、1998

(受理 平成14年3月19日)